

税理士みむらの

プチ経営塾

日本で一番大切にしたい会社より

株式会社 ラグーナ出版

企業に、「障がい者を雇用する場合、どの種別の方を受け入れますか」というアンケートを取ると、身体が75%、知的が13%、精神障がい者に至っては1.3%にすぎません。精神疾患の患者は、病気の苦しみと社会からの疎外による二重の苦しみを味わっています。患者の方々の、世の中への「出口」をつくりたい…そんな思いから設立されたのが、ラグーナ出版です。

精神保健福祉士と精神科医師の2人が設立

ラグーナ出版は、鹿児島市にある精神科病院の精神保健福祉士の川畑善博さんと、精神科医師の森越まやさん、当時入院中の竜人さんがつくれた、文芸誌「シナプスの笑い」の創刊をきっかけに、2006(平成18)年に発足したNPO法人「精神をつなぐ・ラグーナ」が始まりです。

「シナプスの笑い」は、精神障がい体験者による文芸作品・病気の体験記、病気への対処法を話し合う座談会、精神科医療に関する話題などが掲載された雑誌です。この本は次第に多くの賛同者、読者、投稿作品が集まる雑誌へと成長し、当時はNPO法人での活動でしたが、それならば本格的な仕事としていこうと2008(平成20)年「株式会社ラグーナ出版」設立。



川畑善博さんとは・・・

1968(昭和43)年に、鹿児島県出水市で生まれました。地元の高校を卒業後、東京の大学に通いますが、環境の激しい変化と思春期の葛藤もあり、人とのコミュニケーションを難しく感じ始め入学後すぐに休学してしまいます。引きこもりのような生活を余儀なくされ、この間、人との関わりについて考え続け、哲学や精神医学、心理学、文学の本に耽溺します。1年休学をして5年目に卒業し、埼玉県内の進学塾の講師をし、その後、出版社へ転職。6年後父親が病死。鹿児島に戻る。地元での新しい就職先が精神科病院のスタッフでした。そこでは精神障がい者への病院や社会の処遇は閉鎖的でした。「病院からの出口をともに探していきたい」と考えていた時、竜人さんと出会いました。

竜人さんとは・・・

1981年福島県生まれ。アメリカ、鹿児島で育ち、高等学校の陶芸科を卒業後、作家を目指し上京。埼玉県の新聞販売所に住み込みで働いていました。そのころ勤務先で統合失調症を発症し鹿児島に帰郷。精神科病院に入院中、自らの体験をつづった「霊界大戦」を執筆。



「霊界大戦」とは・・・精神科病院に入院中の自らの体験を文章にしたもの。

入院中に精神保健福祉士の川畑さんと現会長である森越まやさんと出会いました。



森越まやさんとは・・・

医師であったお父さんの関係で、4歳まで東京で暮らし、その後鹿児島・種子島で育ちました。小さいころから医師を志し、埼玉医科大学に進学、精神科を専攻。大学の医局で6年の研修後、府中の関東医療少年院に精神科医として入りました。3年後鹿児島の病院に就職。「病院の精神科で、精神障がいの人々の治療や相談をしていると、3年くらいで自分自身が苦しくなってしまう、転々と病院を変えてしまう」そうです。医療少年院を退職後、イギリスへ、3年後又イタリアへ。そこで働いている多くの障害者の存在や、ラグーナ出版設立のきっかけとなる小さな出版社を知りました。そして川畑さんや竜人さんを知り、本作りを始めました。ラグーナ出版に専念するため2011年夏に病院を退職し、現在は週3日の非常勤で病院に通い、精神障がい者の治療や相談に乗っています。

精神障害者を社会復帰させたい・・・

病院は急性期の治療の場所であり、働くことで病気を治していける社会全体の仕組みが必要だという思いを実現するため、「出版会議」を開催。その成果を踏まえて創刊されたのが2006(平成18)年3月、ワードで作られた雑誌「シナプスの笑い」第1号でした。

そのふた月後、心の病気についてもっと世の中に出していこうという考えのもと、NPO法人「精神をつなぐ・ラグーナ」という団体を作りました。主な内容は、月に1回のメンバーのおしゃべり会と、年3回の雑誌の刊行です。活動資金などは川畑さんと森越さんのポケットマネーと、ジョンソン&ジョンソンからの助成金でした。

また2011年4月から障がい者の自立訓練を行うことになっていたため、現在の鹿児島中央駅前のビルの一室に入居しました。ここで約30名が仕事をしたり、自立訓練をしています。

「シナプスの笑い」が伝えたい10のこと

1. 此の病を通して見える世界のこと。
1. 此の病の不思議さのこと。
1. 此の病は、誰にでも起こり得ること。
1. 途方に暮れたとき、灯火となる言葉のこと。
1. 病のつらさを分かち合うこと。
1. 回復の喜びを分かち合うこと。
1. 家族や友達の優しさのこと。
1. 文字の原動力となりうる病の体験のこと。
1. 精神医療福祉のいままでとこれからのこと。
1. 最後まで生き抜くこと。

今後の課題について・・・

土地の利をいかして、地域とつながり、人も会社も地域の中で発展することを目指したい。従業員、利用者一人一人が健康で安定して仕事を続けられる会社でありたいと願う。就労支援、自立支援を行いながら、病気の症状そのものの改善を目指すには、主治医や医療とのつながりは欠かせない。病気の再発の予防や症状の改善に努めるために、家族や医療との連携を作り、事業所の支援者も医療チームの一員となって力を合わせるシステム作りが、今後の大きな課題であると考えている。

